

3. ワシントン大学図書館所蔵外邦図その発見と整理

ワシントン大学図書館日本研究司書
田中あずさ

『外邦図ニューズレター』No.11 巻頭の「ワシントン大学・ハワイ大学からの外邦図収蔵の報告」でご紹介頂いた通り、米国ワシントン大学図書館でも、2014年冬に外邦図の所蔵が明らかになった。本稿では、まず外邦図の発見と、その後を試みた来歴調査について、次にこれまでに行った図幅整理について、最後に、所蔵図幅を幾つか紹介する。

ワシントン大学は、米国北西部、シアトル市にメイン・キャンパスを持つ州立大学である。創立は1861年で、2021年の冬学期時点で、46,284名の学生（学部生・大学院生）が所属する。シアトル市、ボセル市、タコマ市とフライデーハーバー島のキャンパスにあるあわせて16の学部図書館・分館に800万点の蔵書を持つ。図書館職員数は350人で、年間利用者数は550万人である¹。

著者の在籍するタテウチ東アジア図書館は、学部図書館・分館の一館として、東アジア研究を支援する役割で、主に日中韓言語の研究資料（本、雑誌、視聴覚資料など）約854,628点²を有している。東アジア地域を含む地図類の殆どは、本館であるスザロ・アレン図書館（Suzzallo-Allen Library）の地図室で、地図専門の司書によって管理されている。外邦図が発見されたのも、この地図室であった。

2014年の2月、地図専門司書が地図室でファイル棚の大移動をしていた時に、外邦図107枚と内邦図（「内国図」と記述される事もあるが、このレポートでは「内邦図」とする）3000枚ほどが発見された。地図専門司書の元で働いていた日本人のアシスタントが外邦図資料である事を確認、後に巡り巡って外邦図発見の知らせが著者の元にも届いた。地図室にはおよそ、27万点の地図、9万点の航空写真、2千点の地図帳³が所蔵されているが、外国語の地図の整理は、外国語の出来るボラ

ンティアや学生アルバイトが地図室に在籍している際に少しずつ進めるしかなく、外邦図も手つかずのまま、地図室の奥深くで何十年も眠ったままになっていたようだ。

外邦図発見の数か月前、私は Pacific Neighborhood Consortium (PNC) の年次会で初めて小林茂先生にお目にかかる機会があった。以前、図書館利用者の日本研究者の薦めで、小林先生の『外邦図——帝国日本のアジア地図』を拝読し外邦図に興味を持ったのだが、その著者による、外邦図とGISに関するご発表がある、というので是非ともご発表を拝聴し、ご挨拶させて頂いたのだった。その際に、当大学にも外邦図が渡っている可能性がある事、また外邦図がいかに歴史的また研究価値のある資料かを教えて頂いた。先生とのこのタイムリーな出会いが無ければ、その後、当館で外邦図が発見されたところで注意を払えなかったかもしれない。

外邦図発見後すぐに、小林先生のお取り計らいで、外邦図デジタルアーカイブ構築に携わられた、東北大学の関根良平先生、山本健太先生（現國學院大学）が、発見されたおよそ百枚の外邦図と三千枚の内邦図の確認の為にシアトルを訪問して下さいました。先生方はわずか二日で数千枚の地図に目を通され、内地の地図は「内邦図」や「内国図」と言う事さえ知らなかった私に、外邦図と内邦図の基本的な見方と、有用な所見を教えて下さった。例えば、内邦図は戦後、連合軍に最新版を用意するよう命じられていた事、ワシントン大学では、各図幅の戦前版と、連合軍の命令で修正した応急修正版を所蔵している事を指摘して頂いた。この2つの版は、戦前戦後の地理的変化の観察などに役立つ。

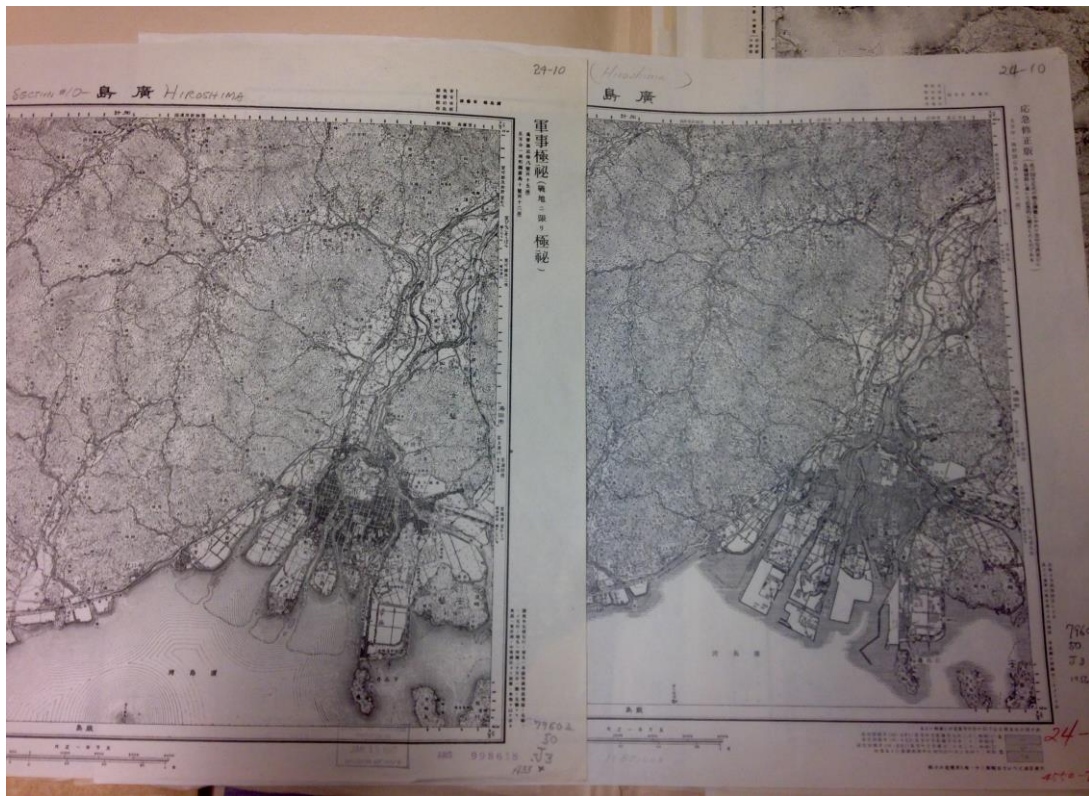


図 1: 広島戦前戦後

図 1 は、広島の前と戦後作成の図幅である。左側が昭和 8 (1933) 年の印刷で、右側は昭和 24 (1949) 年に修正され、昭和 31 (1956) 年に印刷されたもので、原爆投下前後の広島の地形の変化が明らかだ。また、産業発展史の研究者には、東京西南部、横浜、神戸、須磨、大阪西北・西南部、小倉など主要な産業港の戦前・戦後の図幅を利用いただいた事もあった。当学所蔵の内邦図は、国内地域の地図がほぼ揃っており、北海道、東北、関東、中部、近畿などと地域ごとのシリーズとして作成されていた事が分かる。内邦図は、外邦図と同じく、接收されアメリカに渡り、やがて当学に渡ったと考えられるため、外邦図と合わせて整理を進めている。

関根先生、山本先生には、外邦図、内邦図共に、横須賀鎮守府、陸軍習志野学校、東亜研究所などの所蔵印が見られる事も指摘して頂いた。

図 2 の左の図幅には東亜研究所蔵書之印、右の図幅には横須賀鎮守府の所蔵印が見られる。図 3 は、地図の裏に押された習志野学校の印である。戦後、地図を含む日本の軍事資料がどの様に接收されたのか不明な点も多いが「1945 年に GHQ によって、満鉄東京図書館・参謀本部陸地測量部・陸軍習志野学校などの諸機関（東亜研究所や陸軍士官学校などの可能性がある）から接收された外邦図はまずアメリカ陸軍省 (War Department) の軍事地図局 (Army Map Service = AMS) へと送られたとされている⁴。こうした所蔵印は、接收場所や移管経路調査に役立つ情報として記録していきたい。

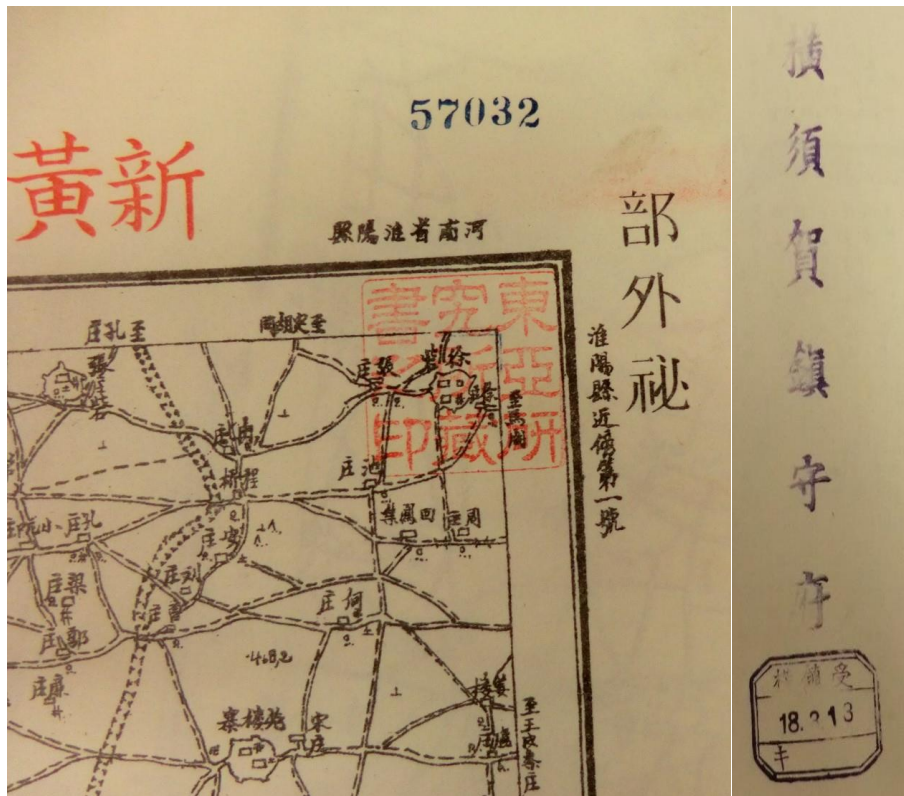


図 2: 左: 東亜研究所蔵書之印、右: 横須賀鎮守府の所蔵印

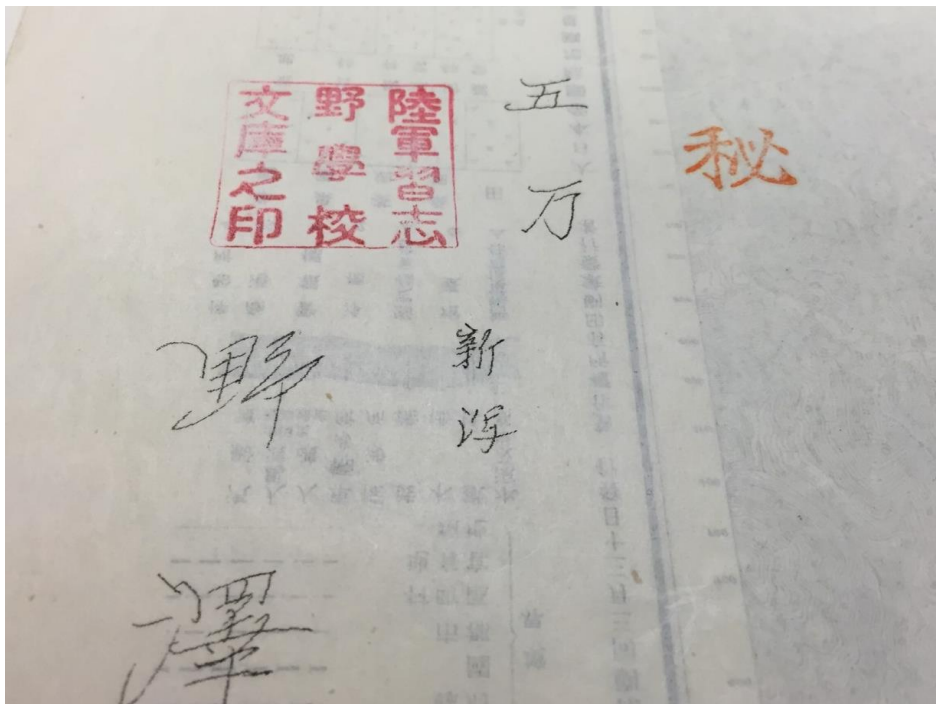


図 3: 地図の裏面に押された陸軍習志野学校文庫之印

来歴調査

ワシントン大学へ外邦図が渡った経緯については、ワシントン大学図書館寄贈課の記録や、大学の歴史の記録文書資料が所蔵されているワシントン大学アーカイブを調査したが答えが見つからず、図幅にある米国陸軍地図局（Army Map Service）や米国議会図書館（Library of Congress）の所蔵印から来歴を探る事にした。しかし、結論を先に申し上げると、未だ明確な来歴は不明のままである。

米国陸軍地図局寄託プログラム（Army Map Service Depository Program）

当館所蔵の外邦図の何点かには、図4の

ように米国陸軍地図局の所蔵印があるので、これらの地図が、どこかの時点で、米国陸軍地図局を経由した事は間違いない。太平洋戦争中、アメリカ軍は海外地域の地図情報が十分になく、軍事計画の為にはアメリカ国内の大学や公共の図書館の地理資料に頼り切りだったようで⁵ 協力館は必要とされる地域の地図があれば、米国陸軍地図局に貸し出していた⁶。そのお礼とも言ふべきだろうか、協力館は戦後、米国陸軍地図局で収集されていた接收地図の寄託を受ける事となる⁷。ワシントン大学も、このルートで外邦図を受け取ったのだろうか。



図4: Army Map Service Libraryの印。Distribution - Do Not Return to Army Map Service Library（配布用、米国陸軍地図局図書館に返却すべからず）と書かれている。

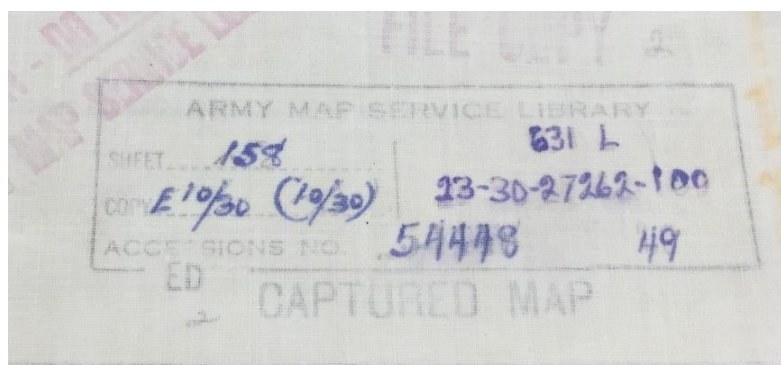


図5: 米国陸軍地図局図書館の印。Captured Map（接收地図）と表記されている。

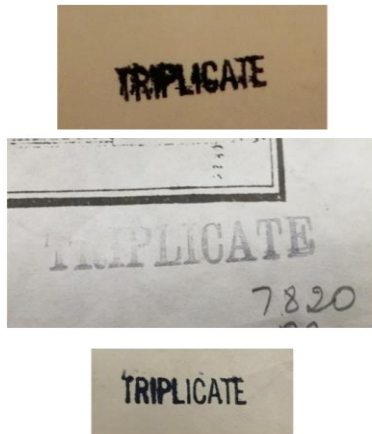


図 6: 米国陸軍地図局の印のある図幅には、Triplicate という印のあるものもあり、3部重複している事を示している様である。

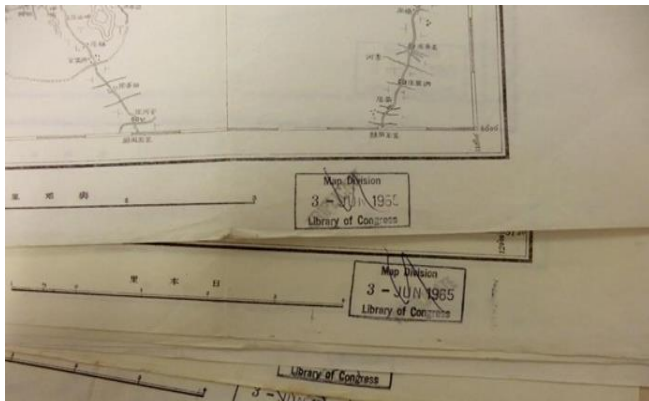


図 7: 議会図書館 (Library of Congress) 印



図 8: 左: オレゴン州立大学から到着した外邦図・内邦図 右: 外邦図と内邦図に仕分ける

『外邦図研究ニューズレター』No.9の、「5資料.アメリカ合衆国で第二次世界大戦後にAMS (Army Map Service) から”Captured Maps” (ドイツと日本から接收した地図) を配分された大学と図書館のリスト」では、小林先生が入手された、1950年2月27日付の、ドイツと日本の接收地図の寄託プログラムの参加館のリストが掲載されている。残念ながら、このリストに、ワシントン大学の名前は無かった。そこで、このリストに掲載されている大学図書館、一件一件に問い合わせ、地図担当司書に、各館の外邦図の所蔵の確認と、当館の外邦図の来歴の手がかりを探っている旨、相談した。殆どの館からは返信が無いが、外邦図など見たこともないという返事だったが、オレゴン州立大学 (Oregon State University) の貴重書室のアーキビストであるエリザベス・ニールセン (Elizabeth Nielsen) さんからは、外邦図の所蔵があると教えて頂き、受け入れ当初に米国陸軍地図局と交わされた書簡のコピーまでお送り下さった。書簡は、ニールセンさんの許可を得て、当学の外邦図案内のページ⁸で公開している。

1945年4月の書簡によると、当時、オレゴン州立大学の地理学教員であった、W. D. Wilkinson 博士が、アメリカ陸軍工兵司令部の大尉として、米国陸軍地図局図書室の担当をしていた縁で、オレゴン州立大学 (当時は Oregon State College) が、接收地図寄託プログラムの参加館の一つとなっていたことが分かった。

1945年11月の書簡では、米国陸軍地図局は、オレゴン州立大学を含む寄託プログラム参加館に、「第二次世界大戦中に接收し米国陸軍地図局で精査した⁹」 接收地図類の配分に関心があるか問い合わせしており、参加館は、希望する地域の地図をリクエストする様に指示されている。この参加館リストにもワシントン大学は含まれていない。この申し出に対し、オレゴン州立大学は、太平洋地域、パリ盆地、アルプス地域¹⁰の接收地図をリクエストしている。1949年1月の書簡によると、オレゴン州立大学が受領した

地図は、ドイツ語、ロシア語、そして日本語のものであったようだ¹¹。

米国陸軍地図局とオレゴン州立大学の間で交わされた書簡からは、ワシントン大学の外邦図の手がかりはつかめなかったが、外邦図など接收地図が寄託プログラムを通して、直接全米の図書館に配分された様子をありありと読み取る事ができた。オレゴン州立大学の外邦図コレクションには米国陸軍地図局印のみが見られる。ワシントン大学所蔵の外邦図は米国陸軍地図局印のみのあるものもあるが、米国陸軍地図局印と議会図書館印と両方見られるものの方が多い。次に外邦図が議会図書館からワシントン大学へ渡った経緯について検討する。

米国議会図書館地図課夏季整理プロジェクト (Library of Congress Division of Maps Summer Sorting Project)

1979年にワシントン大学図書館の地図資料担当となったスティーブ・ヒラー氏によると、彼が着任した時には既に、図書館に外邦図があったという。彼が聞いた話によると、外邦図は地理学部のジョン・シェーマン (John Sherman) 教授が学生を「米国議会図書館地図課夏季整理プロジェクト」に送った際に持ち帰られたものだという¹²。

議会図書館地図課では、全米の大学図書館や地理学部から、地図専門司書、教員、学生を集め、議会図書館で不要、あるいは重複となっている地図類を整理するための「夏季整理プロジェクト」を1950年の夏から¹³始めていた。在籍大学で何らかの給与を得ている「協力者 (cooperative participant)」には議会図書館から金銭的謝礼は出なかったが、1週間働くと、報酬として1000枚の不要・重複地図・地図帳を大学に持ち帰る事が許されたという¹⁴。2001年までに、ワシントン大学を含む、135大学から438人の参加者があり、200万点の地図や地図帳が譲り渡されていたようだ¹⁵。

議会図書館地図課の年報をひもとくと、1968年度と1971年度の「夏季整理プロジェクト」の報告欄に、ワシントン大学からの参加者の名前

があった。1968年の当学からの「協力者」は、702点の地図と39冊の地図帳を受け取ったと記録されていた。どのような地図が受け渡されたのか詳細は書かれていなかったが、「過去18か月に、主に米国陸軍地図局から受け取った地図の大量の重複地図があった」と但し書きがされていた¹⁶。後日、参加者の名前から卒業生名簿を調査し本人に連絡を取る事ができた。外邦図来歴の謎がついに解けるのではないかと期待したのだが「確かに、1968年夏のプロジェクトに参加したものの、持ち帰った地図は日本語のものではなかった」との返事だった。

一方、1971年の参加者は、10週間に渡って仕分け作業を手伝い、その間、議会図書館から給与を得ていた様で「協力者」として不要・重複地図を大学に持ち帰る事は無かったようだ¹⁷。

「夏季整理プロジェクト」に学生を送っていたシェーマン教授は1996年に亡くなっており¹⁸、詳細をうかがう事は叶わない。しかし、教授がワシントン大学で教鞭を取っていたのは、1954年から1986年だから、少なくとも、1954年から、地図担当ライブラリアンが着任した1979年までのいつかの時点で、外邦図がワシントン大学にもたらされたと考えられそうだ。

図幅整理

前述の、オレゴン州立大学のニールセンさんは、ワシントン大学図書館の地図室で見つかった外邦図・内邦図の来歴調査にご助力下さっただけでなく、オレゴン州立大学図書館で所蔵の外邦図・内邦図の寄贈をお申し出下さった。2018年7月17日、外邦図2418枚、内邦図1445枚、インデックス地図79枚が、ワシントン大学図書館に届けられた。この寄贈により、ワシントン大学図書館所蔵の外邦図・内邦図コレクションはおおよそ7千枚に拡大した。

整理はまず図幅を外邦図と内邦図に仕分け、国や地域に分けたあと、シリーズ毎にまとめる事から始めた。シリーズには1号2号などの番号が付いている事が殆どなので、シリーズ内は番号順に整理した。次に、書誌データの作成に取り掛かった。

書誌データをどの様に作成するかは検討を要した。議会図書館地図課のミーンズ節子さんとスタンフォード大学図書館の中寄静さんは長年外邦図の整理をなさっており、ワシントン大学所蔵の外邦図の整理について当初から今日に至るまで随分相談に乗って頂いている。議会図書館もスタンフォード大学図書館も、外邦図は目録で整理されている。しかし一般的に地図資料の目録作成は大変な時間を要する。当学で日本語図書カタログが不在だった事もあり、これだけの量の地図一枚一枚の目録を作成するのは不可能だと判断した。

外邦図の目録整理には独特の難しさがある。その要因の一つは外邦図の地区名の特殊性にある。多くの外邦図は地域毎のシリーズで編成されているが、これは、当時の日本軍が、およそ軍事目的、政治目的で区分けしたものだだろう。また、経年による地名の変更や行政区画再編成のあとなども見受けられる。例えば、「清國二十万分一圖」内に「盛京省」というシリーズがあるが、「盛京省」は「遼寧省」の旧称である。「直隸省」シリーズの「直隸省」は現在「河北省」に編成されている。目録のルールでは「米国議会図書館件名標目表」として現在の行政区画名を入力する事になっているが、外邦図独特の区画名のあり方や地域名の変更を加味すると、目録を取るのは大変な作業になりそうだと考えた。

目録では、出版・製作年も入力するルールだが、外邦図は、測図時期、製版時期、発行時期、はたまた、修正測図時期など、地図製作過程の重要な時期情報が複数あり、どの情報を入力すべきかの判断も難しい。

また、「軍事機密」「軍事極秘」「軍事秘密」「極秘」「秘」と記された機密レベルも、日本軍が軍事的重きを置いていた地区を知る手がかりとなり、研究に役立つと思われる情報で目録に記録したいところである。しかし、目録ではどのように入力すべきだろうか。それから、目録のルールでは、「同版同タイトル」資料に対し一件の目録レコードを作成するが、機密レ

ベルが異なる同じタイトルの図幅は、別の版として、新たにレコードを作成するべきなのだろうか。また、機密レベルが途中で変わり、朱書きで新たな機密レベルに変更が加えられている

図幅が時々あるが、こうした機密レベルの変更情報などは、どのように入力すべきか、既存の目録ルールに答えを見出す事ができない。

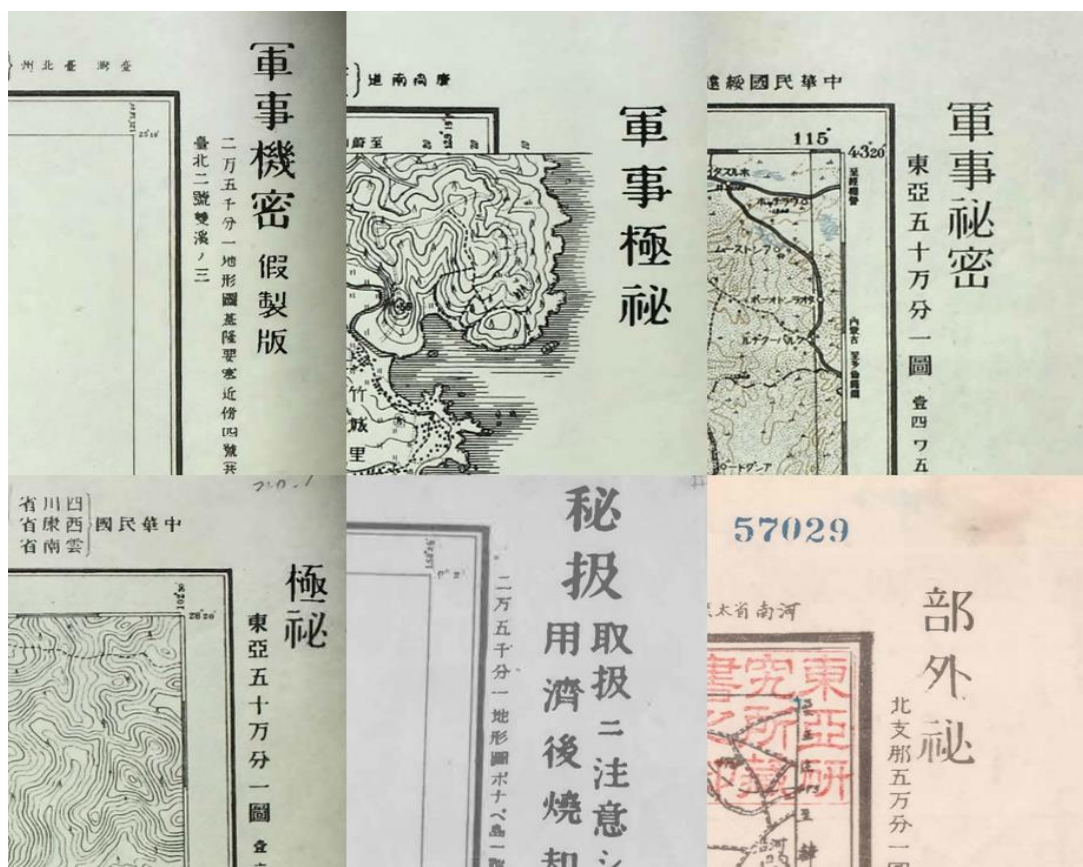


図9: 機密レベル

目録作成では、地域名、製作時期、機密情報などの入力で足踏みをしてしまうが、インベントリーであれば、地図上の記述をそのまま転記すれば良い。また、小林先生の GIS 関係のご発表やデジタル・スカラシップの登場を観察するに、目録作成よりも、メタデータの提供を優先させるべきと判断し、インベントリーを作成する事にした。

インベントリーの作成は、地図担当司書とメタデータ・ライブラリアンと相談した上で『東北大学外邦図デジタルアーカイブ』

(<http://chiri.es.tohoku.ac.jp/~gaihozu/>)の書誌データをメタデータのベースに使用させて頂く事とした。地理学の専門家の先生方のニーズを汲んだ内容で、更にアーカイブ構築用に作られているので、汎用性がある。当学で所蔵

しているものを整理しながら、『東北大学外邦図デジタルアーカイブ』内に同版のものがあれば、書誌内容をほぼそのまま転記し、所蔵印情報や「AMS 番号」などアメリカに渡った外邦図特有の情報は追記、『東北大学外邦図デジタルアーカイブ』に掲載のないものは、手動で入力している。

インベントリー項目の一つ「AMS 番号」だが、整理を始めた頃は図幅に押されているこの AMS で始まる番号が、通し番号なのか、何か規則に従った番号なのか分からなかった。たまたまスタンフォード大学の外邦図データベースで、当館所蔵の図幅とスタンフォード所蔵のものを見比べている時に、AMS 番号が同じであることに気付いた

インベントリー入力内容の例

Title (図幅名)	周家口
Surveyed Country (測量機関国)	Japan
Surveyed Institution (測量機関)	多田部隊測量班
Plate Date (製版時期)	中華民國 9 年製版、昭和 13 年製版、昭和 15 年 1 月複製
Series Name (シリーズ名)	新黄河流域圖 其 20
Secrecy Level (機密レベル)	部外秘
Color (色)	3 色 (黒・赤・青)
Scale (縮尺)	1 : 50000
Latitude/Longitude (緯度経度)	E 154° 45' 0", E 155° 0' 0", N 49° 30' 0", N 49° 40' 0"
AMS Number (AMS 番号)	該当なし
Previous Owners (Japan)	東亜研究所
Previous Owners (North America)	Library of Congress. Division of Maps (1965)

次ページの図 10 は「朝鮮二十萬分一圖」シリーズ内「咸興」の図で、ワシントン大学所蔵の図もスタンフォード大学所蔵の図¹⁹も右下に「AMS967307」と同じ AMS 番号が付されている。

図 11 も「咸興」だが「朝鮮二万五千分一地形圖」のもので上記のシリーズとは異なる。米国陸軍地図局はこれら二つのシリーズが異なる事を把握しており、こちらのシリーズの「咸興」にはワシントン大学所蔵の図にもス

タンフォード大学のもの²⁰にも同じ AMS 番号「AMS939971」が付されている。

ただし「AMS 番号」には間違いも見ついている。図 12 の 2 図はどちらも「比律賓五萬分一圖」シリーズ内の図幅だが、右はワシントン大学所蔵の「ポリリオ」、左はスタンフォード大学所蔵の「ブルデオス」²¹で異なる地域の図でありながら「AMS967271」と同じ番号が付与されてしまっているケースである。

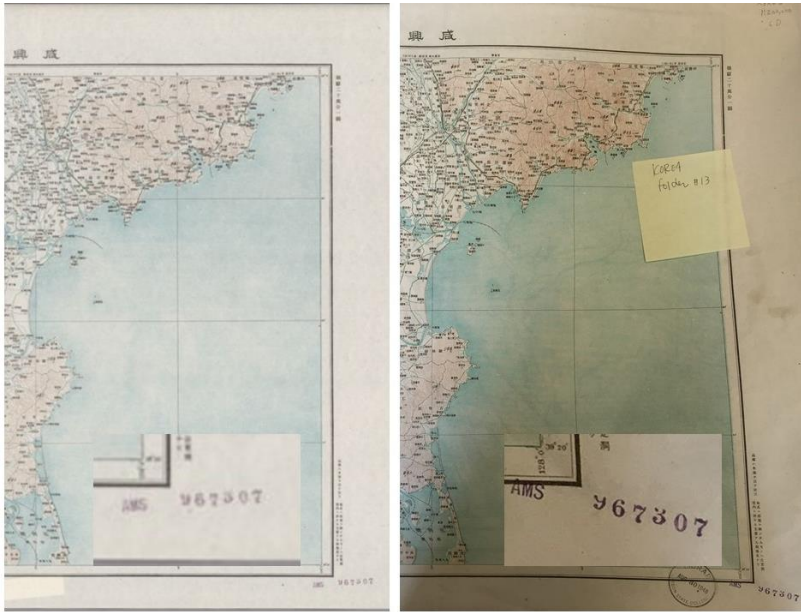


図 10: 左「朝鮮二十萬分一圖」シリーズ内「咸興」(スタンフォード大学所蔵)
右「朝鮮二十萬分一圖」シリーズ内「咸興」(ワシントン大学所蔵)

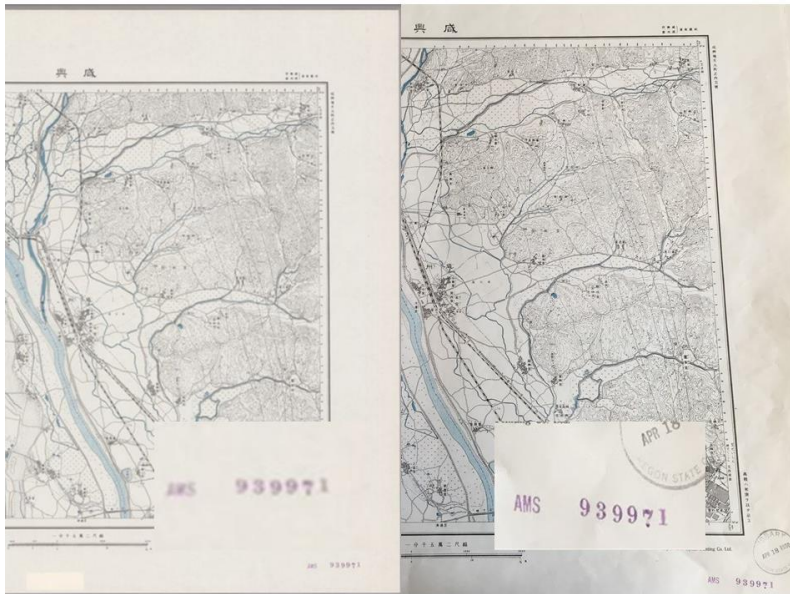


図 11: 左「朝鮮二万五千分一地形圖」シリーズ「咸興」(スタンフォード大学所蔵)¹
右「朝鮮二万五千分一地形圖」シリーズ「咸興」(ワシントン大学所蔵)

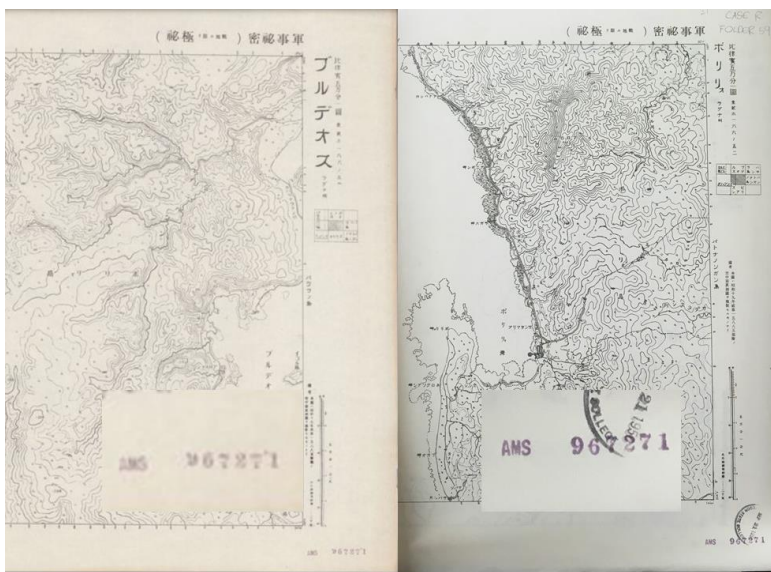


図 12: 左「比律賓五萬分一圖」シリーズ内の「ブルデオス」(スタンフォード大学所蔵)¹
右「比律賓五萬分一圖」シリーズ内の「ポリリオ」(ワシントン大学所蔵)

メタデータの利用

こうした一次データは、今後「東北大学外邦図デジタルアーカイブ」の様なデータベースを作成したり、既存の地図データベースに参加する場合にも汎用性が高い。テキストアナライズや GIS など、デジタルスカラシップにも活用してもらえる様、メタデータは Gaihozu Collection at University of Washington の ペ ー ジ (https://guides.lib.uw.edu/research/gaihozu/uw_gaihozu)

で、list of UW holdings として一般公開している。

空間情報マッピングのためのプラットフォーム CARTO を用いて、試しに幾つかの地図情報を視覚化してみた。使い方は簡単で、メタデータ情報をエクセルなどのフォーマットでプログラムに読ませ、地図上での情報表示方法（色、タイムライン、など）を指定すれば良い。

工夫が必要だったのは、位置情報と年の入力だった。インベントリーでは図幅に示されている四方 4 地点の緯度経度情報を記しているが、CARTO では 1 点の位置情報を入力する事になっている。このため、便宜上、地図の北東角部の位置情報を使う事にした。

また、CARTO は緯度経度情報の項目は、10 進法数を使っている。インベントリーでは「東北大学外邦図デジタルアーカイブ」と同じく 60 進法数で記録しているため、10 進数に換算する必要があった。地図担当司書に相談すると、A1 セルに「度」

B1 セルに「分」 C1 セルに「秒」が入っている場合、十進経緯度に換算するには、

$$A1+B1/60+C1/3600$$

という式で換算できるという事で、インベントリー（エクセル）に 10 進数の緯度経度のコラムを追加し一気に計算した。

また CARTO では、年月日の入力が求められるが外邦図の製作時期は年単位である。このため、便宜上「製作年 1 月 1 日」を使う事にした。

このような細工をした上で、試しに、日本軍がどの地区・地域にどの機密レベルを付与していたか、1938 年と 1941 年の情報を比較した。利用したメタデータ項目は、「図幅名」「製作年」「機密レベル」「緯度経度」で、機密レベル毎に色別で表示される様に設定した。「軍事極秘」は赤、「軍事秘密」はオレンジ、「極秘」は黄色、「秘」は緑にしている。当館所蔵で位置情報がメタデータに記されているもの（1938 年製作の 320 図、1941 年製作の 807 図）のみを抽出しているため、学術的な結論を出すにはもっとデータが必要だ。しかし、以下の図の通り、1938 年と 1941 年では、地図を製作した地区が明らかに違ふし、地区ごとの機密レベルの差も視覚化できる事がわかる。

CARTO には、タイムラインを表示できる機能もある。外邦図は明治から第 2 次世界大戦終戦まで作成されていたとされるが、特定の時期に作成が集中した事はあつたらうか。こうした疑問に答えるには、このタイムライン機能が便利だ。

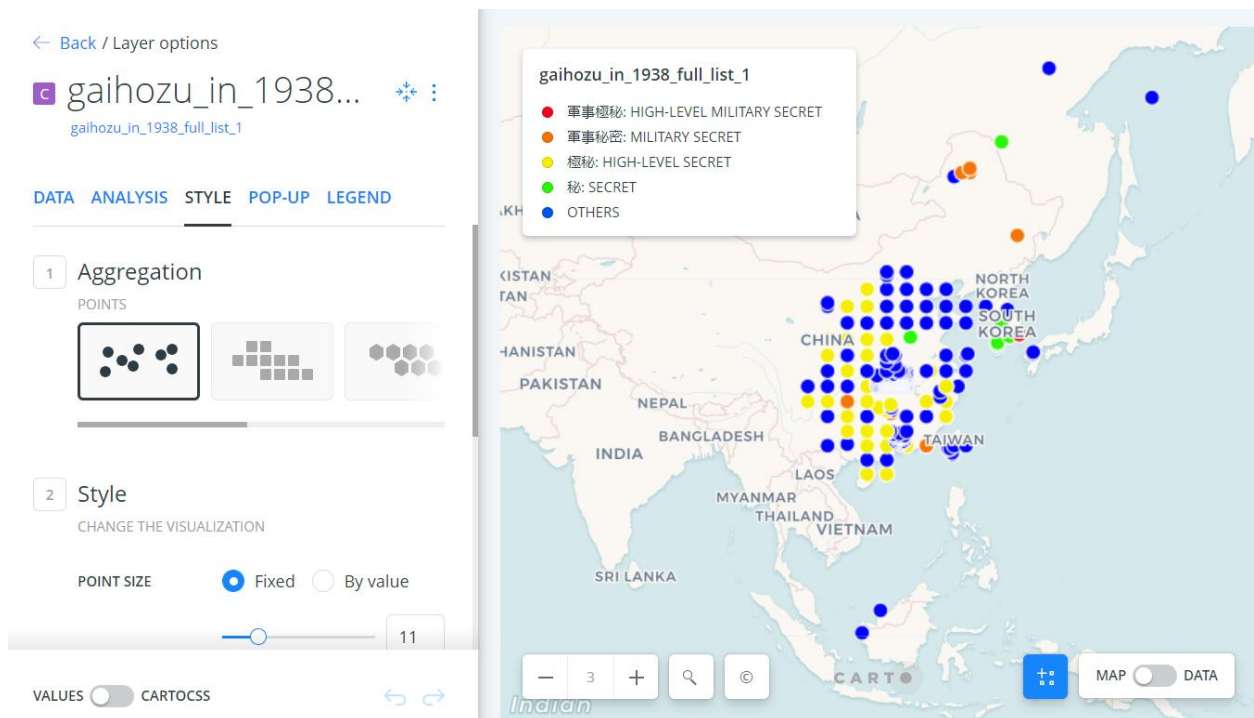


図 13: 1938 年製作の外邦図、地域毎の機密レベルを視覚化。青色は機密レベルの記載がなかったもの。

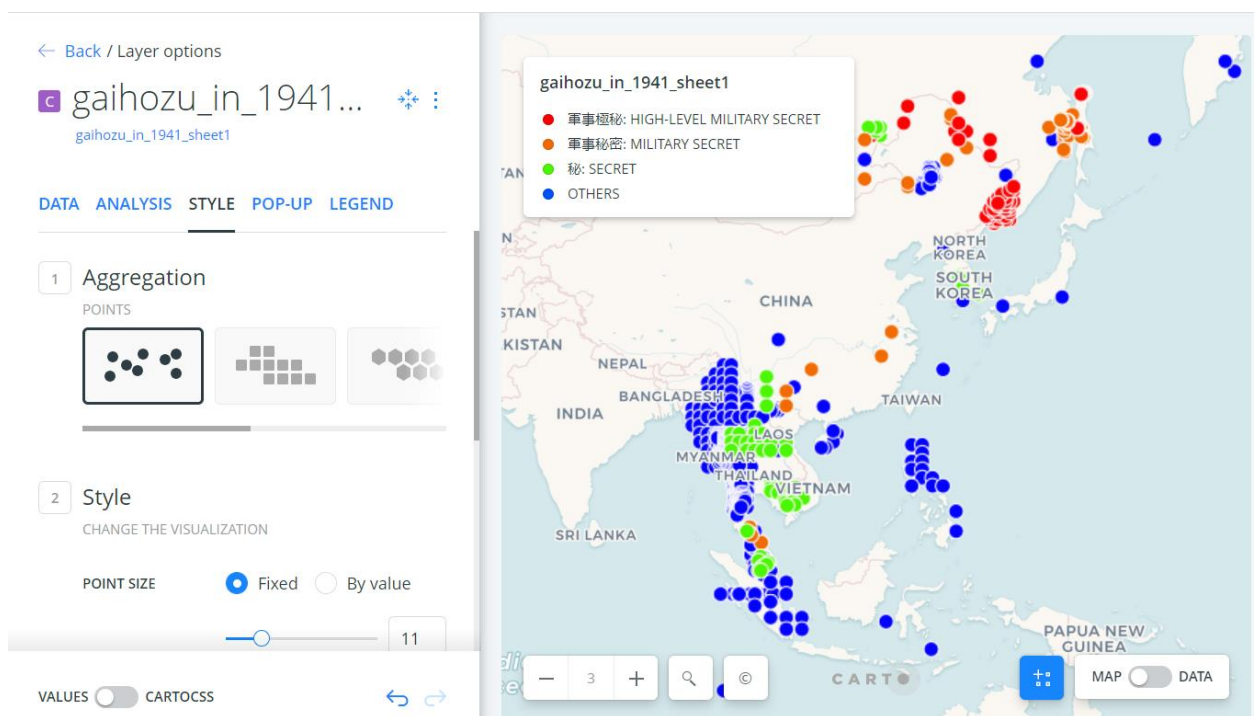


図 14: 1941 年製作の外邦図、地域毎の機密レベルを視覚化。青色は機密レベルの記載がなかったもの。

以下の図は、メタデータから、「図幅名」「製作年」「緯度経度」の項目を用いて、CARTOでタイムラインを表示したもののスクリーンショットである。CARTOでは、アニメーション機能を用いて、時間（年）毎に外邦図が製作された土地に印が出る様になっている。

前述の通り以上の例はワシントン大学所蔵の図幅のみを元にしたもので、外邦図全体を調査すれば、異なる結果が出てくるかもしれない。しかし、少なくとも、地図一枚一枚や、目録やインベントリを見ても読み取りにくい情報も、地図上に表すと一目瞭然となる事は分かる。また、視覚化することが、何故地域毎に差異があったのか、なぜ特定の時期に特定の場所の地図が作成されたのか

など、仮説を立てる役に立ち、更なる研究へのステップとなる事も想像できる。メタデータがあれば、こうしたデジタルスカラシップの可能性が無限に広がるので、インベントリ作成は価値があると考えている。

更に「図幅名」「製作年」「緯度経度」「所蔵館」を用いて『東北大学外邦図デジタルアーカイブ』に記載のあった日本の機関で所蔵されている図を緑、ワシントン大学所蔵のものを紫で表示する事もできた。この例もまた、利用できる件数が少ないため、日本に残った外邦図、米国に渡った外邦図などについて検討するには説得力に欠けるが、少なくともどこにどの地区の図が存在しているのかを視覚化する事はできる。

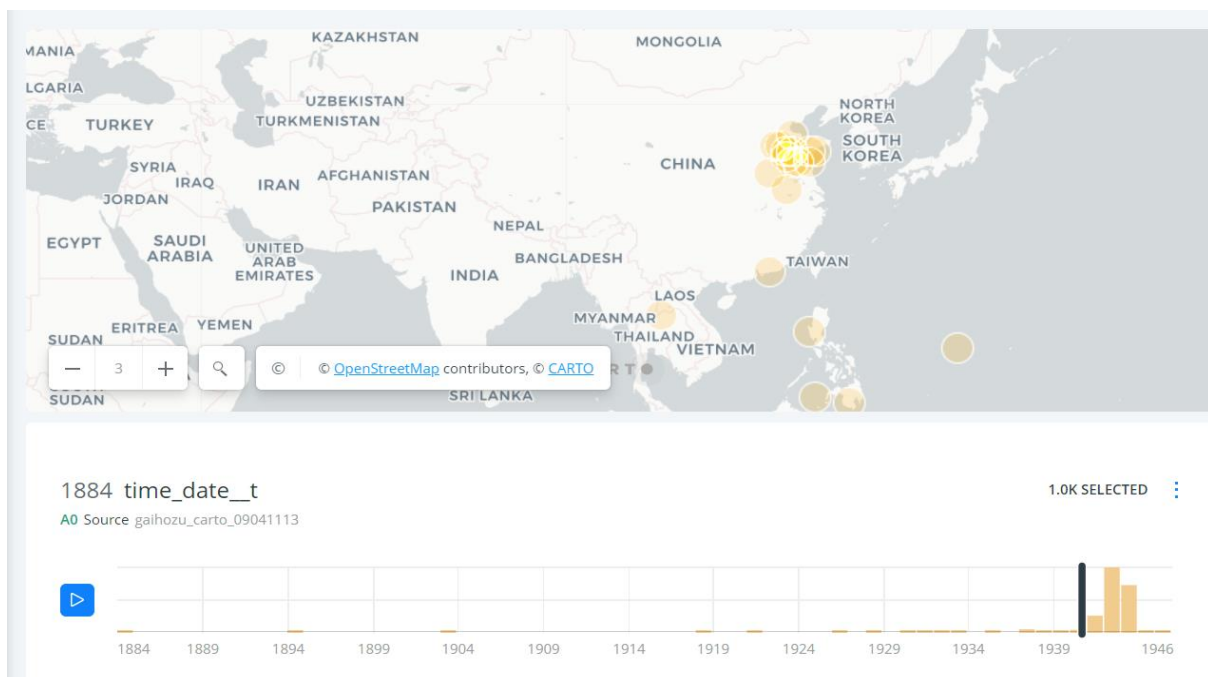


図 15: CARTO からタイムラインの例

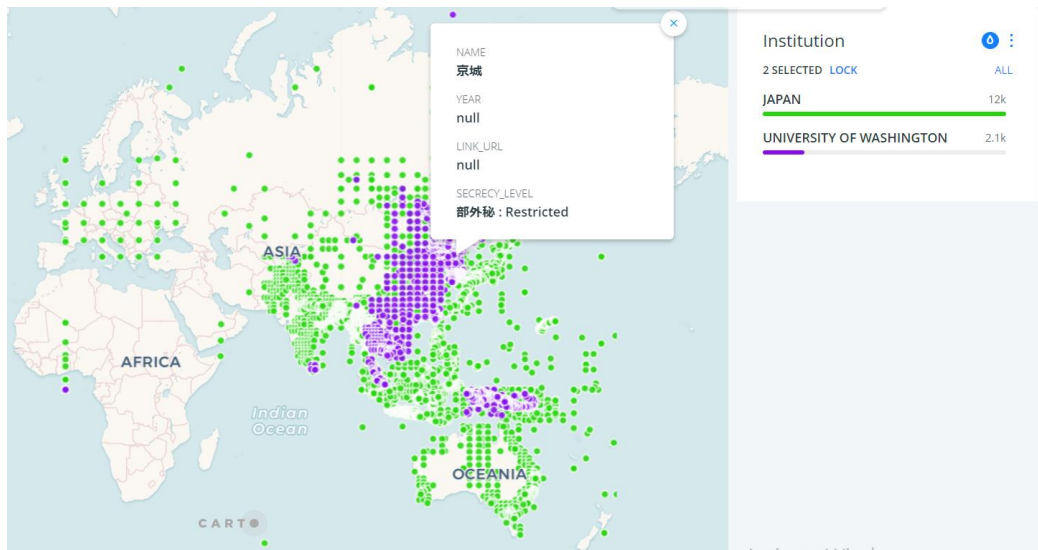


図 16: 『東北大学外邦図デジタルアーカイブ』に記載のあった日本の機関で所蔵されている外邦図を緑、ワシントン大学所蔵のものを紫で表示している

所蔵図幅の紹介

『外邦図ニューズレター』No.11 巻頭の「ワシントン大学・ハワイ大学からの外邦図収蔵の報告」で当館所蔵の「新黄河流域圖 其十九」をご紹介頂いた。その後、整理が進み、「新黄河流域圖」のシリーズは、其十八、其十九、其二十、其二十一の合計 4 枚を所蔵している事が分かった。北米及び世界各地の大多数の学術、研究、公共図書館の書誌データを繋ぐ総合目録で所蔵情報が検索できる総合目録 WorldCat を用いて検索したところ、他大学では、少なくとも、オハイオ州立大学に其九から十一、其十三、其二十一（<https://library.ohio-state.edu/search/o823766919>）、ハーバード大学に其一から其四、其二十三から二十七

（<http://id.lib.harvard.edu/alma/990136468550203941/catalog>）

が所蔵されているようだ。

「新黄河流域圖」のシリーズについては、徳島大学の荒武達朗先生が調査されており「1938 年黄河決潰事件と『新黄河流域図』」

（<https://repo.lib.tokushima-u.ac.jp/en/110008>）が、このシリーズの作成経緯、全体像（合計 27 枚でなっている事など）、そして日本国内外での所蔵状況に詳しい。

『外邦図ニューズレター』No.11 では、当館で発見された「清國二十万分一圖」についても紹介して頂いた。その後の整理で、当館では、第 75-77 号、109-117 号、121 号、166-169 号、171-173 号、175-176 号、184 号を所蔵している事が分かった。これら全ての図幅に議会図書館の所蔵印が見られる。当館の他には、スタンフォード大学が 1-7 号、10 号、12-21 号、23-29 号、31-36 号、38-44 号を所蔵しているようだ

（<https://searchworks.stanford.edu/?q=1128053878>）。

『外邦図ニューズレター』No.11 では、「清國二十万分一圖」のシリーズが、議会図書館では揃っていない事が指摘されていた。

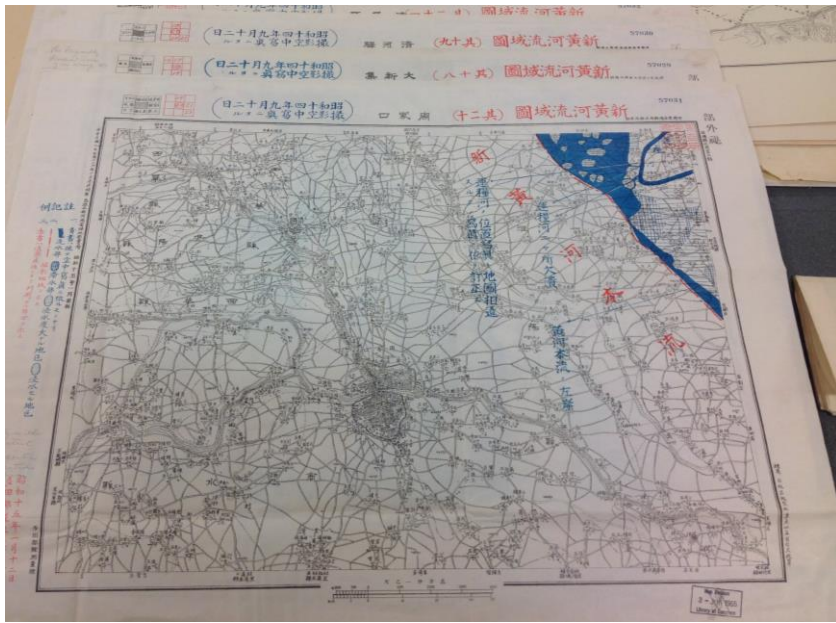


図 17: 「新黄河流域圖」其十八、其十九、其二十、其二十一、日本軍北支那方面軍(多田部隊)調製、いずれも昭和15(1940)年発行。右上に東亜研究所の印、右下に議会図書館の印が見える。

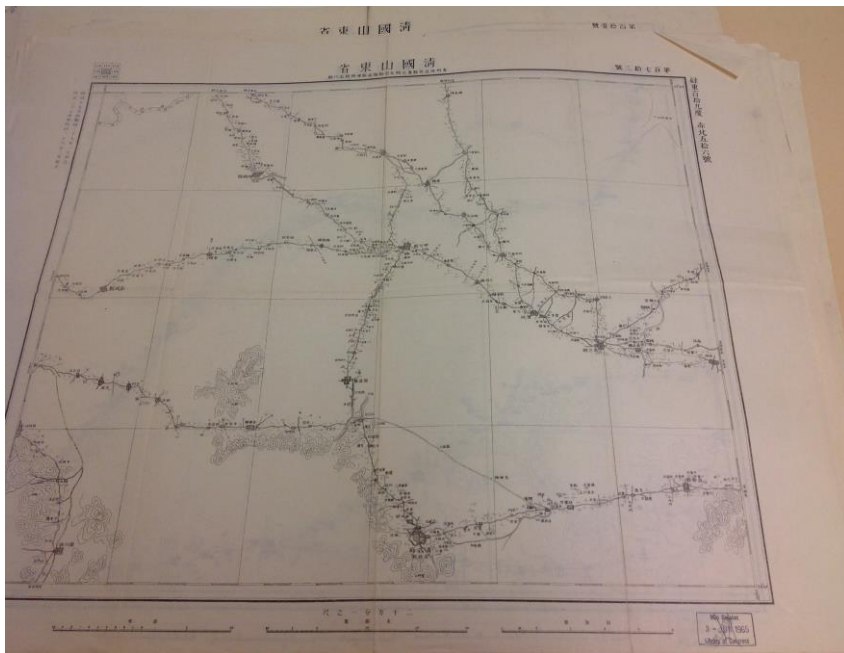


図 18: 清國二十萬分一圖 173号、明治27年、陸軍参謀本部陸地測量部発行

おわりに

地図の整理とメタデータ入力はこれまでに、8名の学生やボランティアの方々に手伝って頂いた。長期的に働いて下さった方としては、慶応義塾大学メディアセンターからのビジティング・ライブラリアンの加藤諒さんと日本研究科の大学院生で

あったモニカ・トワークさんが、それぞれ2018年に外邦図整理を手伝って下さった。皆さんのおかげで、中国(301点)、台湾(196点)、朝鮮(364点)、満州(650点)、ソビエト連邦(141点)、タイ(66点)、フィリピン(67点)、仏領インドシナ(61点)、インドネシア(123点)、

ニューギニア（217点）、その他の東南アジア諸島（94点）の計2280点の外邦図、3600点の内邦図（樺太を含む）のメタデータ入力完了した。

2020年3月以降、パンデミックで当学図書館も閉館し、地図整理も止まっているのだが、状況が良くなり次第、残る南方や欧亜航空図（レニングラード-モスクワ-スターリングラード、テヘラン-バクダッド-アンカラ、ワルソーベルリン-ロンドン、アテネ-ローマ）など数百枚の外邦図、およそ八百枚の内邦図のメタデータ入力を再開する予定である。

また、本館地図室で外邦図の整理をしている際に、たまたま整理作業が行われている地図コレクションの中に外邦図が90枚ほど含まれている事に気が付いた。これは、中国研究者であったウィリアム・スキナー（William Skinner）教授から寄贈された地図コレクションの一部で、他の地図と共に地図課の管轄の元、整理が進められているものだ。そのため、外邦図だけ引き離す訳には行かないが、別途インベントリーだけは取っておいた。殆どが「空中写真測量上海近傍」シリーズの図幅で、その他も中国本土か台湾の地図であった。パンデミック後には、スキナー教授がどの様に外邦図を入手、収集されたのか、先生から寄贈されたアーカイブ文書（G. William Skinner Papers）も調査したいと思う。

去年になって、長らく空席だった日本語図書カタログ担当に、今号のニューズレターで外邦図目録について記事を書いておられる、ヒル恵子さんが就任され、外邦図目録にも挑戦して下さる事となった。インベントリーでは、外邦図に記された細かな情報をありのまま入力する事が可能だが、所蔵館情報の共有には弱い。私が知る限り、北米の外邦図所蔵館は、所蔵外邦図を目録によって整理しており、WorldCatに目録の記録が共有されている。目録を作成し、WorldCatに所蔵情報載せる事で、他機関の外邦図所蔵館との繋がりもでき、また研究者の皆さんに当館の外邦図の所蔵を知っ

て貰える。今後は、インベントリーと目録の両方の良さを活かし整理を進めて行く所存である。

インベントリーや目録作成を進めて行くと、他大学で所蔵していない図幅の情報も見えてくる。ワシントン大学でしか所蔵のない貴重なものがあるれば、デジタル化もしたいと考えている。また、全米に散らばっている外邦図の情報を一元化管理する方法も引き続き探って行きたい。

¹ University of Washington, “Libraries Fact Sheet”, <https://www.lib.washington.edu/about> (最終アクセス2021年1月24日)

² Council on East Asian Libraries, “CEAL Statistics Data in Table,” *Council on East Asia Libraries Statistics*, <https://ceal.ku.edu/quick/all/with/Pacific/2019/2019> (最終アクセス2021年1月30日)

³ University of Washington Libraries, “Map Collection & Cartographic Information Services,” *Map Collection*, <http://www.lib.washington.edu/maps/> (最終アクセス2021年1月30日)

⁴ 久武哲也, 今里 悟之「日本および海外における外邦図の所在状況と系譜関係」小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域：「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会, 2009, 39.

⁵ John M. Anderson, “Forgotten Battles, Forgotten Maps: Resources for Reconstructing Historical Topographical Intelligence Using Army Map Service Materials,” *Historical Geography* 29 (2001), 80.

⁶ Mary Murphy, “History of the Army Map Service Map Collection,” in *Federal Government Map Collection: A Brief History*, ed. Richard W. Stephenson (Washington, D.C: Special Libraries Association, 1969), 4-5.

⁷ Mary Lynette Larsgaard, *Map Librarianship: An Introduction* (Englewood: Libraries Unlimited, 1988), 90.

⁸ University of Washington Libraries, “Correspondence Between Oregon State University and Army Map Service, 1944 to 1947”, *Gaihozu: Why are the Gaihozu at UW?*

-
- ⁹ W. D. Milne to Oregon State College Librarian, November 15, 1945
- ¹⁰ W.H. Carlson to Commanding Officer, Army Map Service, December 8, 1945
- ¹¹ Hanzel Saremal to Mr. Carlson, January 27, 1949
- ^{1 2} Steve Hiller, e-mail message to the author, June 16, 2015.
- ^{1 3} Ralph E. Ehrenberg, “Administration of Cartographic Materials in the Library of Congress and National Archives of the United States”, *Archivaria*, no.13 (Winter 1981-82), 27.
<https://archivaria.ca/index.php/archivaria/article/view/10907>
(最終アクセス 2021 年 1 月 30 日)
- ^{1 4} Harold M. Otness, “A Look at the Library of Congress Summer Map Processing Project.” *Information Bulletin* 3, no.1 (1971), 16.
- ^{1 5} Leanne Kearns, “Summer Help for Geography & Map”, Library of Congress,
<https://www.loc.gov/loc/lcib/0109/intern.html>
(最終アクセス 2021 年 1 月 30 日)
- ^{1 6} Library of Congress Geography and Map Division, “1968 Special Map Processing Project Report.” *Annual Report of the Geography and Map Division Appendix D*, 3-4.
- ^{1 7} Library of Congress Geography and Map Division, “1971 Special Map Processing Project Report.” *Annual Report of the Geography and Map Division Appendix D*, 3-4.
- ^{1 8} Archives West, John C. Sherman Papers, 1943-1995,
<http://archiveswest.orbiscascade.org/ark:/80444/xv94763>
(最終アクセス 2021 年 1 月 30 日)
- ¹⁹ <https://purl.stanford.edu/vt810xs7413>
- ²⁰ <https://purl.stanford.edu/js025xj7253>
- ²¹ <https://purl.stanford.edu/bn284rj6309>